

C 分科会記録 テーマ：「利用者教育：参加者のモチベーションを高めるために」

参加 17 校 20 名

全大会発表者：森下（東邦学園大学）

司会：小川（中京大学）

参加委員：中上（愛知みずほ大学）、小川（中京大学）、疋田（中部学院大学）、石川（日本福祉大学）

記録：石川（日本福祉大学）、疋田（中部学院大学）

1.はじめに

愛知医科大学、愛知淑徳大学、日本福祉大学の3大学より自館の利用者教育の事例報告を行った。

2.事例報告

愛知医科大学

利用者教育を館員により「情報学」の単位で1年生を対象に行っている。学習方法は問題解決型学習を取り入れグループでプレゼンテーションを行うもので評価については館員が出す宿題も含め30%は館員が評価している。教員より館員に専門的なことを指導できるのかとの批判もあるが反面情報学の教員が積極的であり図書館と隣接している情報センターと連携し情報検索指導を行っている。

愛知淑徳大学

「一人から始めるオリエンテーション」を企画しホームページ上に利用者教育のキャラクターを設定し、案内している。対象者はすべて初心者で、個人レベルに応じてレファレンスを経験した職員が行っている。今後の問題として留学生、世代別オリエンテーションをどのように行うかについてさまざまなアプローチが必要である。

日本福祉大学

利用教育の中心は授業の1コマを「ステップ別利用セミナー」というかたちで教員からの予約制で実施しているものである。ただし図書館としては授業評価はしていない。利用セミナーには事前研修を行った学生をアシスタントとして採用しており、半期に一度反省会を行っている。参加学生は、学生アシスタントにはフレンドリーで興味を持つ学生も多い。1年生中心の利用教育として位置付けており、約7割を超える受講率である。障害学生については、セミナーの際に障害種別に配慮して、個別対応を行っている。

まとめ

各館とも参加者が興味を持てるような利用教育をいかに行うべきかについて様々な工夫を凝らしていることが明らかになった。又、広報活動の強化、担当者の対応の均一化、学内の協力体制等利用者教育のあり方を再考した。